

## SRID 元会員を偲んで

### 兄松本洋の思い出

松本健

#### 松本元会員のご紹介



自称「地球建築士」。1956年に早稲田大学卒業。英国のマンチェスター大学修士課程で都市計画を学び、1958年より日本道路公団に勤務して以来、日本の高速道路建設に13年間勤務。1969年に6カ月、アジア開発銀行に出向し、アジアの開発に関わったことから、開発途上国に魅せられた。1970年からは、(財)国際開発センターに研究員として勤務し、開発プランナーとしての人生を練磨。1978年からは、(財)国際開発推進協会の常務理事、後に専務理事となり、日本の政府開発援助の推進に貢献。1991年、国際文化会館に移り、翌年に専務理事となった。過去50年の間、58カ国以上の開発途上国を訪問し、国造りを手伝ってきたことを自負。

松本さんは、SRID 会長を1990年から5年間、務められました。

#### 兄松本洋の思い出

兄の松本洋は、去る3月21日老衰のために静かに生涯を閉じました。91才でした。私が前日に見舞ったときは微かに意識があったと思われませんが、全く苦しみはなかったようで安らかな最期でした。この度、高橋一生先生を通してご依頼をいただきましたので、拙文を書かせていただく次第です。高橋先生をはじめ、SRIDの方々には兄が生前賜りましたご厚誼にたいしまして深く御礼申し上げます。

「私は人間が好きである。その思いで70年あまり人に関わってきた。人助けをしばしば頼まれる私は、『よろず引き受けどころ』を自任している。私は人の力になりたい。若い人であろうが、肌の色や言葉が違おうが、たとえ価値観を共有していなくても、人間として真剣勝負の気概を以って向き合えば互いの尊厳をおのずから感じるだろう。もちろんその基盤としては、『人を信じ、信頼する』ことが不可欠だ」と、兄は自分史である「地球建築士 国際交流・協力の五十年」でこのように書き出しています。

この短い文のうちに、兄の生き方、考え方が端的にあらわされていると思います。兄が私淑していた下河辺淳氏(元国土庁事務次官)は、以下のように評しておられました。

「彼の国際人ぶりは、少しく他のひとと異なっている。(中略)それは、いつでも非営利活動のボランティアであるといってよいであろう。ちょっとしたオシャレな身支度で、ものやさしい振る舞いで、相手が誰であろうと区別することなく親しく交際するさまは、日本人には珍しいと思う。国際交流活動のために臆することなく事業を企画し、協賛者を求め実現させていくプロデューサーとしてもなかなかの人物で、得がたい特

性を持っている」と。

兄が、生涯の大部分を途上国の開発にかかわるようになったのは、ある意味で偶然でした。大学の建築科を卒業したとはいえ、建築物をデザインすることや、設計図を引くことには情熱を感じなかったのです。建築家としての才能にはあまり恵まれなかった印象ですが、それが却ってその後の人生には幸いしたともいえましょう。兄は、「ほかに興味をかきたてるものが多すぎたため、それを一言ことと言えば、『人間関係の構築』で、人と人との協力が育む国際協力」だったと書いています。兄は、自分がちゃんと設計して建てた建築は自宅の犬小屋だけだったと、半ば自虐的な自己紹介をしています。

早稲田卒業後、マンチェスター大学に留学して都市計画を学び、帰国後は道路公団に就職して13年間、「名神高速道路」など日本の初期の高速道路建設に携わりました。1969年に6か月間、交通計画の専門家としてアジア開発銀行に出向してマニラに滞在する機会がありました。その時の経験でアジアの開発途上国に魅せられてしまったことが開発に携わるきっかけとなったようです。

その後の職歴を見ると、1970年から国際開発センター（IDCJ）で開発プランナーとしての経験を積み、1978年に国際開発推進協会（APIC）に移り、日本の政府開発援助の推進に携わり、1991年からは国際文化会館の理事を務めています。その間58ヶ国以上の開発途上国を歴訪してその国造りを応援してきました。途上国の人々の自然な表情をカメラで撮り続けたスライドは2万枚以上に達し、その一部をまとめたのが「半地球」という写真集ですが、ご好評をいただいたようです。

兄が一番得手とした活動は、国際的なイベントを企画実行することだったと考えます。その代表例が「地球コミュニティ会議」でした（第一回は1981年開催）。本人によると、国際協力を一層推進するための新しい切り口の国際会議を開催し、「日本を含むアジア諸国が中心となり、アジア人の発言や能力を地球社会の営みに貢献していく」ことを目指したものでした。参加者は国や企業の枠組みを離れて、地球人たる個人として地球社会の行く末を案じながら話し合うフォーラムで、「国旗を使わない国際会議」を特色としていました。

第一回目の会場は神戸の人工島ポートピア、テーマは「アジアの起業家と国際協力」でした。会議の運営委員長は、外務省事務次官や駐米大使を務めた牛場信彦氏（当時APIC理事長）で、兄はAPICの専務理事として事務局長を務めました。参加者としては元世界銀行総裁のロバート・マクナマラ氏をはじめ、16か国90名の方が来られ、3日間の会議は「工業国の見地から」「途上国の見地から」「相互利益の模索」の三つのセッションに分かれて、活発な議論が展開されたようです。兄は、この会議で「企業家の精神で国際協力にどう取り組むか」という視点からの議論が行われることも期待していましたが、その成果に満足していました。日経新聞や神戸新聞でも大きく取り上げていただき、国際的興業士（師でなく）としての自信もついたのでした。

第二回目は、「東南アジアと太平洋時代」をテーマとし、1984年マレーシアのクアラルンプールで開催。マハティール首相の出席と基調演説を実現させています。22か国、62名の参加があり、元アジア開発銀行総裁の渡辺武氏や大来佐武郎氏（元外務大臣、日本を代表する国際派の官庁エコノミスト）の出席を得ています。

第三回目のテーマは「太平洋の開発と協力」、1987年西サモア（当時）の首都、アピアが開催地でした。「地球はひとつ」という精神のもと、学者、企業家、役人、マスコミ関係者70名の方が、約20か国から個人の資格で集まり議論しました。開発の発展段階論で有名なアメリカの経済学者、ロストウ教授も参加しました。「開発援助」とは「助けるもの」と「助けられるもの」という一方向ではなく、あくまで相互利益追求の上にあるのだということが明らかにされた機会でした。兄は、「何より印象に残ったのは、南の人々の底抜けに明るい笑顔と、将来にわたって深い関わりを継続させていこうとする北と南の友情であった」との感想を残しています。

最後となった第四回目の会議は、1990年に上海で開催されました。このころから中国の国際的なプレゼンスがいよいよ増してきています。この会議では、後に中国の首相となった、朱鎔基上海市長（当時）にもスピーチをしてもらっていますが、中国側の参加者の発言は公式論に終始したという印象だったようです。注目されたのは、「中国では二酸化炭素が原因となる酸性雨が深刻化し始めている」という報告が国家環境保護局長からなされたことでした。上海での会議を終わって、兄は、地球コミュニティ会議の初期の目的は達せられたと感じたようでした。

兄によると国際会議成功の鍵は三つ。一つは会議を地球のどこで開くかという地理的条件、二つ目はアイディアの位置づけで、どのような性格の会議とするか、三つ目は会議場と参加者の宿泊施設が同じか近くであることで、会議が終われば、そのまま別れてしまうようなことがないようにすることだ、と結論づけています。

兄は私より4才半年上で、私との間に姉が一人いる3人兄弟の長男でした。幸い、わりあい仲の良い兄弟姉妹であったと思います。兄弟喧嘩であまり殴られた記憶もありません。

兄は大きなよく透る声の持ち主でした。森村小学校にいた時期、朝礼が終わると兄は週番の上級生として号令をかけていましたが、美声は学校中で知られていたほどです。鎌倉の中学では軍事教練の時に分隊長を命ぜられています。それも声の大きさのお陰だったようです。高校生の頃、声の質を見込まれてプロの音楽家から歌の指導を受けていたことがあります。レッスンから帰ると、イタリアの歌曲「カロミオベン」を練習していたのを憶えています。何回も繰り返し練習していたので傍で聴いていた私までもメロディを覚えてしまいました。数年前に、ある大学の会合で教授の一人が余興でこの歌を歌ったとき、私は密かに70年前の兄を思い出していました。音楽家の先生

は、兄に「将来声楽家にならないか」と誘って下さるほどだったと聞いています。高校時代は応援団長をしていました。人前で話をするのも好きでしたが、声の大きさには自信があったようです。ただ、近年携帯電話で話をするようになってからは、建物の中でも声のボリュームを下げることをしばしば忘れることがあったために、周りの人がしばしば当惑したようです。

兄が中学2年の時でした。終戦の年でしたが、私たち一家は春から数か月間軽井沢に疎開していました。食糧が極めて不足していましたので、家族総出で家のまわりを開墾して、南瓜、じゃがいも、蕎麦などを近所の農家に教わりながら栽培しました。南瓜は決して美味とは言えない品種でしたが、それでも夏の終わりに70個ほど収穫できて家族で喜んだのを覚えています。当時兄が慣れないながらも懸命に鍬をふるって土を掘り返していた姿を私は感心して見ていました。また、少しでも飢えを凌ぐために兄と一緒に野生のうど、ギボウシ、たらの芽などの山菜を探して歩き回りました。まさに育ち盛りだった兄は、本当にひもじかったのでしょう。ある日、親が大切にしまっていた数個の缶詰を押し入れから見つけ出してこっそり食べようとしたのですが、見つかってしまいました。もちろんこっぴどく叱られました。その夜の食事は兄の喉を通りませんでした。その時兄の涙が一筋流れたのを私は密かに記憶の中にしまっています。

兄は小学校時代から憧れていた同級生の女性との結婚を果たし、一女をもうけて幸せな家庭生活を送ったと思います。兄は相当我儘な面あり、しかも体も頑健でなかったこともあって、兄嫁には随分と苦勞をかけたと思います。しかし、晩年は「敏子ちゃん、トシコちゃん、」と呼び掛けて甘えさせてもらっていたことが印象に残っています。

父が亡くなってから、私たち兄弟とその家族は、毎年元日に兄のマンションに集り、兄夫婦が振舞ってくれる特上サーロインのローストビーフを心ゆくまで堪能するのが楽しみでした。20年以上続いたように思います。ジューシーに焼きあがった大きな肉の塊を、兄はイギリスから持ち帰った愛用の大型のナイフとフォーク使って何枚もスライスしてくれました。切れ身を薄く切ることも兄のこだわりでしたが、その味はまさに絶品で、今でも話題になっています。

兄は、国際文化会館の専務理事を辞した後も、同じビルの中にごく小さな部屋（キュービクル）を借りていました。最近は私が務めていた事務所もありましたので、兄はしばしば私の事務所に顔を出してくれました。夕方私が1人で事務所に残っているような時には、兄と二人で紅茶を淹れて飲みながら談笑したことも度々ありました。楽しい思い出です。

兄とは、大体において仲が良く、ひどく争うこともなく、人間として尊敬し合い、助け合って80年以上関係を続けられたことは、私としても幸運なことでありました。兄は、恩師、先輩、友人、また家族にも恵まれて多くの方々のご厚意をいただいたて一生

を過ごすことができました。兄を見送ってその人生に改めて思い巡らすとき、兄は楽しく、他人の幸せのためにもある程度お役に立つことができ、個性豊かな幸せな人生を送れたと、身内としても兄を誇らしく思っています。